

そこに今も残る斑鳩寺に聖徳太子のモデルの一人である上宮法王に力を貸していました。この上宮法王と妃が相次いで疫病にかかり亡くなり、死後、河勝はその一族の面倒を見てきたことに聖徳太子と秦河勝問題があったのです。

法隆寺の金堂に釈迦三尊像があり、夢殿に聖徳太子を模したとされる救済観音像がありますが、それは上宮法王の似せ絵で、それらが播磨の斑鳩寺からの移座であることに、法隆寺が斑鳩寺と呼ばれる理由があるのです。それは天武が天智皇統を斥けた壬申の乱後に畿内大和で倭国を再興し、それを荘厳するために、大和の仏法興隆を法興寺と法隆寺の建立をもつてし、前者を倭国の元興寺(豊前の椿市廃寺)から、後者を播磨の斑鳩寺からの移築・移座をもつてしたことが、現在、法興寺である飛鳥寺に元興寺仏があり、法隆寺に斑鳩寺の釈迦三尊像や救済観音像がある理由で、天武は法隆寺の斑鳩宮に上宮法王の子孫を据えたのです。

その法隆寺の神宮寺に龍田大社とは別の龍田神社があり、そこは能の金春流の発祥地とされています。その門前を通る奈良街道から当麻道が枝分かれしていることは、藤屋敷と浅からぬ縁があったことを語ります。私はこの斑鳩宮にあった皇子を『日本書紀』が時期をずらし記した山背皇子と思っており、山背は山城で京都の秦氏を暗示しているのです。その山背皇子は六四三年に蘇我入鹿によって滅ぼされた『日本書紀』

ていた私にとって、どうして、日本列島があんなにいつぱんに生まれたのか疑問だった。つまり、なんらかの渡来勢力が日本列島を侵襲した歴史が古事記の国産み神話となったなら、当然、侵襲した島が書かれているはずと思っただけ。しかし、読み返してもどうにもわからず、ただ漠然と玄界灘にある島の名前と似ている島(隠岐島・大島・女島)があるなど思っただけ程度であった。

はじめは、小呂島と能古島がオノゴロ島である意味がわからなかった。あくまで音が近いだけで、こんな小さな島を獲得しても意味がないし、そもそも小呂島は水源に乏しく生きていくにも厳しい島である。軍隊が駐留するには不向きと思われた。研究者の中にはオノゴロ島を小呂島と考えた人も、いたにはいたようだが、まったく支持を受けていないのかインターネットでいくら探してもみあたらない。私も、捨て去られた説だったのだからと、一顧だにしてこなかった。

しますが、それはその暴挙を蘇我入鹿に振り、天智・鎌足の六四三年の血塗られた手を隠し、そこに六八六年の大津皇子の変に連動した山背皇子の変を重ねて記述したと見ています。つまり、六八六年の大津皇子の変に連動し、藤屋敷がその時襲われ、中将姫の母の「紫の上」は殺されたように、山背皇子も斑鳩宮を襲われたのです。大津皇子の変は倭国から日本国への転換となる九州勢力によるクーデターで、天武と畿内勢力の粛清で、その畿内勢力が物部系大氏であることについて私はこれまで何度も語ってきました。それと釣り合うものとして天武勢力があったので、それは武内宿禰の藤勢力で、その藤氏と天武が結ばれていたことを藤原氏は隠したので、天武がその倭国復興を、その藤氏の中心(原)に立ったことを記念して造都したのが藤原京であったので、天武は倭国王統を代表しつつ、倭国皇統の中心に立っていたことを知るので、このクーデターは飛鳥の大氏の中心・大原と今は桜井と名を改めた、実は朴井連雄君(物部連雄君)の本拠・朴葉井を襲うと共に、大和への竹内街道からの出入り口にあたる当麻の藤屋敷と、奈良街道からの出入り口にあたる法隆寺をクーデター側は押さえる必要があったのです。とするなら、中将姫の母の「紫の上」は天武の妃であったのです。この龍田や桜井の朴葉井が能の金春流と円満流の発祥地とされていることは、能が踏まえる共同幻想(秘密を語るもので、

この隠された死者への鎮魂なしに能は生まれることはなかったのです。この法隆寺の異変を『日本書紀』は時をずらし、大化の改新前の六四三年の山背皇子の変として記述したのです。それはその一族全員が法隆寺と共に炎上・焼死した悲惨な事件でした。その犠牲者二十一人の名が『上宮聖王法王帝説』に残っています。

山代大兄王、春米女王、長谷王、久波太女王、波止利女王、三枝王、伊止志古王、麻呂古王、馬屋古女王、財王、日置王、片岡王、白髭部王、手嶋女王、難波麻呂古王、麻呂古王、弓削王、佐々女王、三嶋女王、甲可王、尾治王

この二十一人の犠牲者全員が山背皇子の一族として斑鳩宮にあったのか、それとも、天智・鎌足の乙巳の変に連動し殺された一族の名かは決めたいたいが、どちらにせよ一堂に集められ焼き殺されたことは確かです。山背皇子は秦氏と関係が深く、また、その妻が藤氏の娘であったことに、法隆寺の斑鳩宮の変の悲劇は由来したのです。なぜなら、この悲劇は大和での藤波(藤氏)を語るもので、河内王朝の皇別氏族殺しの一例が、この山背皇子一族の悲劇にほかならず、それが全国的に展開したところに、藤皇統の河内王朝皇別氏族の問題があったのです。

- その山背皇子事件や藤屋敷の「紫の上」と中将姫事件は、奈良の藤波時代にあつては、陰で語られるほかに、その墓の造営も思うに任せないものとしてあつたか見えません。
- 一. 伊予之二名島(いよのふたなのしま)：四国
 - 二. 隠岐之三子島(おきのみつごのしま)：別名は天之忍許呂別(あめのしころわけ)：隠岐島
 - 三. 筑紫島(つくしのしま)：九州
 - 四. 伊伎島(いきのしま)：別名は天比登都柱(あめひとつばしら)：壱岐島
 - 五. 津島(つしま)：別名は天之狭手依比壳(あめのさでよりひめ)：対馬
 - 六. 佐度島(さどのしま)：佐渡島
 - 七. 大倭豊秋津島(おほやまとよあきつしま)：別名は天御虚空豊秋津根別(あまつみそらとよあきつねわけ)：本州
- 以上の八島が最初に生成されたため、日本を大八島国(おおやしまのくに)という。二神は続けて六を産む。
- 一. 吉備児島(きびのこじま)：別名は建日方別(たけひかたわけ)：児島半島(岡山県)
 - 二. 小豆島(あづきじま)：別名は大野手比壳(おほののこひめ)：小豆島(香川県)
 - 三. 大島(おほし)：別名は大多麻(おほま)：大島



『盗まれた神話』—記・紀の秘密(ミネルヴァ書房)20
10年3月刊行古代史コレクション3 より

しかし、その秦氏が平安時代に奈良の藤原北家と共に平安京遷都と共に復活すると、奈良時代に藤波の犠牲になり、闇に葬られた者への鎮魂が心ある人に言われる時代がきたのです。それを記紀史観を受け入れる妥協の中で国風文化が営まれたように、かつての倭国仏教や播磨仏教の聖人を聖徳太子とする一人格の中に封じた太子信仰の中で、磯長墓の造営があったのです。

私の幻視では、その合葬墓の死者ははじめ斑鳩宮で犠牲になった上宮法王と藤宗家が結ばれた山背皇子夫妻の墓として二棺合葬墓として計画されましたが、その妻の母である「紫の上」が加味され、三棺合葬墓として造営されるに至ったか見えます。この藤屋敷にあった「紫の上」は、天武が「紫野に終える妹」と歌ったその人で、現『万葉集』はそれを額田王に振り、歌のみならず、歴史から抹殺してきたのです。(泉北すえむら資料館での二〇一二年十二月二六日の講演より)

古事記の国産み神話に玄界灘の島々を見た! (上)
アマチュア古代史研究者
淡能基呂太郎(おのころたろう)

私は、古事記の国産み神話に出会った約二〇年前、ある違和感を覚えた。神話とは実際に起こった史実を下敷きに作られたものだろうと考えた。これを地図で表したら図のようになり、私には、古事記の国産み神話は、日本に渡来した勢力が日本の島を制圧していった史実が反映されているのではないかと考えている。しかし、古事記に記述された島々の比定されている場所があまりにもばらばらである点がいづつも気になっていた。瀬戸内海の島は交通の便がいい島という意味で、わからないでもないが、それでも瀬戸内海には、他にもっと多くの島があるし、なぜそこだけ産んだ(手に入れた)かわからない。五島列島や男女群島に至っては、交通の便からも全く意味不明である。古代史研究家の古田武彦氏も、さすがに男女群島はありえないとして、両児島を沖ノ島と考えたようである。しかし私は、渡来勢力はもっと手近な範囲を制圧したのではないかと考えた。つまり、玄界灘の島々である。よくみると六つの小島の名前は、それぞれ玄界灘の島の名前に似ているものがある。「大島」と「女島」である。どちらも大八洲の国を産んだあとの六つの小島である。他にも、「壱